

# 「出典語」の変容と享受

——山上憶良の「撃目」と「申臂」の対をめぐって——

富原カンナ

はじめに

悲<sub>レ</sub>歎<sub>レ</sub>俗道<sub>レ</sub>仮合<sub>レ</sub>即離<sub>レ</sub>易<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>留<sub>レ</sub>詩一首并序

竊<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>积<sub>レ</sub>慈<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>示<sub>レ</sub>教<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>先<sub>レ</sub>開<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>婦<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>五<sub>レ</sub>戒<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>化<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>界<sub>レ</sub>。

周<sub>レ</sub>孔<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>垂<sub>レ</sub>訓<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>前<sub>レ</sub>張<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>綱<sub>レ</sub>五<sub>レ</sub>教<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>济<sub>レ</sub>邦<sub>レ</sub>国<sub>レ</sub>。故<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>引

導<sub>レ</sub>雖<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>悟<sub>レ</sub>惟<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>也。但<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>恒<sub>レ</sub>質<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>陵<sub>レ</sub>谷

更<sub>レ</sub>変<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>定<sub>レ</sub>期<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>寿<sub>レ</sub>夭<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>。撃<sub>レ</sub>目<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>間<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>百<sub>レ</sub>齡

已<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>臂<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>頃<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>千<sub>レ</sub>代<sub>レ</sub>亦<sub>レ</sub>空<sub>レ</sub>。且<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>席<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>主<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>夕<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>

泉<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>客<sub>レ</sub>。白<sub>レ</sub>馬<sub>レ</sub>走<sub>レ</sub>来<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>黄<sub>レ</sub>泉<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>。隴<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>青<sub>レ</sub>松<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>空<sub>レ</sub>懸<sub>レ</sub>

信<sub>レ</sub>劍<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>野<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>白<sub>レ</sub>楊<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>但<sub>レ</sub>吹<sub>レ</sub>悲<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>。是<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>俗<sub>レ</sub>本<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>隱

遁<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>室<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>原<sub>レ</sub>野<sub>レ</sub>唯<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>長<sub>レ</sub>夜<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>台<sub>レ</sub>。先<sub>レ</sub>聖<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>賢<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>留<sub>レ</sub>。

如<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>贖<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>誰<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>価<sub>レ</sub>金<sub>レ</sub>乎<sub>レ</sub>。未<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>独

存<sub>レ</sub>遂<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>終<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>。所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>維<sub>レ</sub>摩<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>士<sub>レ</sub>疾<sub>レ</sub>玉<sub>レ</sub>体<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>丈<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>积

迦<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>仁<sub>レ</sub>掩<sub>レ</sub>金<sub>レ</sub>容<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>双<sub>レ</sub>樹<sub>レ</sub>。内<sub>レ</sub>教<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>黑<sub>レ</sub>闇<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>来<sub>レ</sub>、

莫<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>德<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>先<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>。故<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>死<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>死<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>、

不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>。況<sub>レ</sub>乎<sub>レ</sub>縱<sub>レ</sub>覺<sub>レ</sub>始<sub>レ</sub>終<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>恒<sub>レ</sub>数<sub>レ</sub>、<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>慮<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>亡<sub>レ</sub>之

大<sub>レ</sub>期<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>也。(割注略)

俗道變化猶撃目、人事経紀如申臂。

空与浮雲行大虚。心力共尽無所寄。

万葉集卷五所収の「悲歎俗道仮合即離易去難留詩一

首并序」は、作者名はないが、作品の収録状況、及び用語、

作風から山上憶良の作と見做される。序の漢文と七言の漢

詩から成る作品の、序と詩の双方に「撃目」と「申臂」の

対句表現が見える。

撃目之間、百齡已尽、申臂之頃、千代亦空。(序)

俗道變化猶撃目、人事経紀如申臂。(詩)

万葉集をはじめ上代の作品に同様の対句は他に見えない。

一作品に二度にわたり用いていることから、憶良が特別に

関心を寄せた表現と言えるが、従来の諸論、諸注にはこの対句を特に取り挙げて考察したものはない。

「申臂」が經典に由来する語であることは、早く契沖『万葉代匠記』（初稿本）が「経中多『壮士屈伸臂之頃』<sup>フ語</sup>。頃誤作項。」と指摘し、諸本に「申臂之頃」とあるところを「頃」に正している。一方、岸本由豆腐『万葉集攷証』は、『佩文韻府』の引く梁・陸倕「思田賦」の「歴四時于遊水、馳三稔于伸臂。」をあげ、「少しの間を伸臂の間にとへたり。申伸同字也。」と述べる。以後の諸注は、武田祐吉『万葉集全註釈』は『万葉集攷証』に従い、澤瀉久孝『万葉集注釈』は双説とも挙げる。『万葉集全注』（井村哲夫）は『万葉代匠記』の言説を挙げた上で「譬へバ壮士ノ臂ヲ屈伸スル頃ノ如キニ」（涅槃経）……『壮士ノ臂ヲ屈伸スル頃ノ如キニ、即チ兜率陀天ニ往生スルコトヲ得』（仏説観弥勒菩薩上生兜率天経）その他、短時間を言う譬喩的常套語。」と記す。『新日本古典文学大系万葉集』もまた『観無量寿経』の例を挙げ「仏典の常套句による表現。」とする。

このように諸注の見解は『万葉代匠記』『万葉集攷証』に依るが、「壮士屈伸臂之頃」という經典の表現と、「伸臂」と記す六朝の用例とは逕庭がある。そもそも「壮士屈伸臂之頃」という表現はかなり特異だが、經典でど

のように用いられたものであるか、これを「譬喩的常套語」と述べる後の注釈書でも考慮されてはいない。『万葉集攷証』の指摘する用例は憶良の表現により近いが、ただ「伸臂」の語も、もとは經典に根差すものであろう。經典の常套語がどのような変遷を辿り、いかなる表現段階を憶良は受容したか、という考察が求められよう。

## 一

当該表現でなお留意すべきは、憶良の作中では序、詩ともに「伸臂」の語が「撃目」と対せられている点であるが、これについて諸注釈には何の言及もなされていない。その事由に、かかる対句の先例が見出し難いことが挙げられよう。類似例をも含め検討する必要があるが、或いは憶良が独自に「伸臂」と「撃目」を合わせて用いたことが考えられる。

拙稿では「日本挽歌」に前置された漢文における「力負」をめぐる、憶良が漢籍より摂取した用語を、従来とは異なる用い方をなしたことを考察した<sup>1)</sup>。

二聖至極不能<sup>レ</sup>私<sup>レ</sup>力負之尋至<sup>レ</sup>、三千世界誰能逃<sup>レ</sup>黒闇之搜来<sup>レ</sup>。

「力負之尋至」は次句の「黒闇之搜来」と対を成すが、「力負」と「黒闇」の対は他例を見出し難い。拙稿で述べたよ

うに、「力負」の語は、諸注が出典としてあげる『莊子』大宗師篇の「夫藏<sub>二</sub>舟於壑<sub>一</sub>、藏<sub>二</sub>山於沢<sub>一</sub>、謂<sub>二</sub>之固<sub>一</sub>矣。」

然而夜半有<sub>レ</sub>力者、負<sub>レ</sub>之而走。」には見えない。「力負」は、

中国の初期の仏教教義書、姚秦・僧肇『肇論』等に見える

が、通常『莊子』を基とする成語には「藏舟」「舟壑」等

があり、「自有<sub>二</sub>藏舟処<sub>一</sub>、誰怜<sub>二</sub>隙駒過<sub>一</sub>。」(初唐・駱賓王

「丹陽刺史挽詞三首」「駱賓王文集」卷十)、「風雲上慘、

舟壑潛移。」(北周・庾信「思旧銘」『藝文類聚』「人部・懷

旧」と、世の変遷、無常を意味し用いられている。対し

て憶良は『莊子』本文の大男の表象を生かし、死の黒闇天

女と対にし、大力の男、不吉な天女が三千世界を尋ね回る

描写で、病と死より逃れ難い恐怖を表している。従前にな

い取り合わせだが、通常用いられる「藏舟」「舟壑」自体

は谷に隠された舟の意であるのに対し、「力負」は、「黒

闇」と相俟って、死の迫り来る状況を表出し得ている。

これに続く叙述も、慣用語によりながらも独創性の窺える表現がなされている。

二鼠競走、而度<sub>レ</sub>目之鳥且飛、四蛇争侵、而過<sub>レ</sub>隙之駒夕走。

「二鼠」「四蛇」の典故としては、契沖が劉宋・求那跋陀羅訳『寶頭盧突羅闍為優陀延王說法経』を挙げている。象に追われ丘井に逃げ込んだ者が、自分のしがみつく樹根を嚙

る白黒の二鼠、井の底の四蛇を発見するが、樹より滴る蜜に危機を忘れる……という無常の比喩説話である。この経典説話を基とし、中国では、

況復三相併蹙、二鼠攢<sub>レ</sub>危、毒箭惡蛇、尤為可<sub>レ</sub>畏。

(梁・簡文帝「唱導文」『弘明集』卷十五)

といった表現が広まり、我が奈良朝の詩文はこの影響下にあったことを板橋倫行氏が指摘している。聖武天皇宸翰

『雜集』にも、

二鼠常煎、四蛇恒逼。

(「平常貴勝唱礼文」)

他の用例が窺える。一方「過隙之駒」は、「人生<sub>二</sub>天地之間<sub>一</sub>、若<sub>二</sub>白駒之過<sub>レ</sub>郤<sub>一</sub>。」(『莊子』知北遊篇)を基とし、

經典由来の黒鼠との色対で用いられた、

隙<sub>レ</sub>陋<sub>二</sub>白駒<sub>一</sub>、藤縁<sub>二</sub>黒鼠<sub>一</sub>。

(簡文帝「浄居寺法昂墓志銘」『藝文類聚』「内典下・

寺碑」)

等の例も窺える。

二鼠、四蛇、過隙之駒、またそれに類する用語は、単独、

或いは他の用語との対で、人の世の無常を意味する数多の

表現を成してきた。対して憶良は「二鼠」と「四蛇」、「度

目之鳥」と「過隙之駒」を隔句対で対応させており、こう

した例は他に見えないが、鼠・鳥・蛇・駒の四動物が走り

飛び、疾駆する動きで以て、時の流れの迅速なること、世

の無常を表している。

このように憶良の作品には、漢籍より撰取した成語を、通常とは異なる用い方をしたり、従来にない用語と取り合わせた例が見られる。先例に恵まれない「申臂」の用法についても、憶良が独自に「目撃」と合わせて表現した可能性を検討する必要がある。

天平の一知識人の享受した表現の源と伝播を辿り、その創作の独自性を検証することは、広く上代の日本が享受した文学的表現を考える上でも有益であろう。「申臂」の語の由来、変遷を踏まえ、この語を「撃目」と合わせ対句となした憶良の表現をめぐり考察する次第である。

## 二

万葉集研究では、「壯士屈伸臂」之頃」は經典の頻出句という指摘に留まるが、仏教研究の方面から、これに相当するパーリ語聖典の比喻句の考察がなされている。岩井昌悟氏によれば、原始仏教聖典中には「仏や仏弟子が行う瞬間移動の記述のほとんどに『あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばすか、伸ばした臂を曲げるように、(そのような短時間の間に)』という定型句が伴う。」<sup>3)</sup>という。

釈迦の教説を最もよく保持する、現存のまとまった原始仏教經典(初期經典)には、南方アジアに伝わりパーリ語

で記された五ニカーヤと、中国に伝わり漢訳された四阿含經がある。漢訳の『長阿含經』(後秦・竺仏念訳)・『中阿含經』(東晋・瞿曇僧伽提婆訳)・『雜阿含經』(劉宋・求那跋陀羅訳)・『増一阿含經』(瞿曇僧伽提婆訳)は、各々違う部派のものが中国へ伝来し、訳された王朝も年代も異なるが、それぞれパーリ語經典五部<sup>4)</sup>のうちの、長部(ディーガ・ニカーヤ)・中部(マツジマ・ニカーヤ)・相應部(サムユッタ・ニカーヤ)・増支部(アングッタラ・ニカーヤ)の四部に相当する。<sup>4)</sup>漢訳經典の原本が何であったかは問題とされているが、近年中央アジア出土資料による研究の進展により、『長阿含經』『中阿含經』の原本にはガンダーラ語が推定されている。<sup>5)</sup>

パーリ語經典と漢訳經典は、共通の起源より異なる経路を経て発展したテキストであり、大枠は対応しつつも種々の相違がある。「力ある人の臂の屈伸喩」は、パーリ語原典では変化がなく唯一の表現であるのに対して、漢訳經典では、パーリ語にはない短時を意味する「頃」が付され、<sup>6)</sup>様々に表されている。漢訳の比喻句は、八世紀の憶良の受容に至るまでに、どのように変遷してきたのであろうか。

まずはパーリ語聖典と比較的よく対応しているという『長阿含經』の比喻句を挙げる。

時首陀会天知「如来心」、譬如下力士屈伸臂、従

彼天<sub>レ</sub>没、忽然至<sub>レ</sub>此。

(卷一 大本経 大正蔵二／第一卷10頁a)

仏時頌曰、「譬如<sub>下</sub>力士屈<sub>レ</sub>伸臂<sub>一</sub>頃、我以<sub>レ</sub>神足<sub>一</sub>至<sub>レ</sub>無造天<sub>一</sub>。…… (同右／10頁b)

爾時世尊与<sub>レ</sub>諸大衆、譬如<sub>下</sub>力士屈<sub>レ</sub>伸臂<sub>一</sub>頃、忽至<sub>レ</sub>彼岸<sub>一</sub>。 (卷二 遊行経／12頁c)

時比丘於<sub>レ</sub>梵天上、忽然不<sub>レ</sub>現。譬如<sub>下</sub>壯士屈<sub>レ</sub>伸臂<sub>一</sub>頃、至<sub>レ</sub>舍衛国祇樹給孤獨園<sub>一</sub>。來<sub>レ</sub>至我所<sub>一</sub>頭面礼足、一面坐。 (卷十六 堅固経／102頁c)

『大正新脩大蔵経』の校異によれば、卷十六の「伸臂」は、宋本・元本・明本の三本には「伸」とある。「申」「伸」は、『万葉集攷証』も述べるように、『広雅』(釈詁)に「申、伸也。」とある如く、同義と見做される。この二字の異同は經典の当該比喩句に多く見える。なお憶良の当該作では「申」とある。

力士の腕の屈伸喩は、いずれもある場所から異なる別の場所への移動に際して用いられている。一例目は「首陀会天」が「彼天」を没して「此」に至る。二、三例目の主語は仏陀であり、最後例では「比丘」が「梵天上」から姿を消し「舍衛国祇樹給孤獨園」に至る。主語は仏や比丘等様々で、移動する場所も各々に異なるが、二例目に「神足を以て」とある如く神通力によって、瞬時に異空間へ移動

する状況でこの定型句が表されている。

『長阿含経』では、腕の屈伸喩は一樣に「譬如力士(壯士)屈伸臂頃」と表されており、これは初期經典における当該比喩句の最も典型的な漢訳である。この定型比喩句が表された極初期の例は次のようである。

仏以<sub>レ</sub>聖心<sub>一</sub>逆知<sub>レ</sub>其意<sub>一</sub>、譬如<sub>下</sub>力士屈<sub>レ</sub>伸臂<sub>一</sub>頃、飛到<sub>レ</sub>其前<sub>一</sub>。

(後漢・支曜訳『仏説阿那律八念経』大正蔵四六／第一卷835頁c)

時四天王、即遙知<sub>レ</sub>仏当<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>鉢、如<sub>下</sub>人屈<sub>レ</sub>伸臂<sub>一</sub>頃、俱到<sub>レ</sub>頰那山上<sub>一</sub>。

(呉・支謙訳『仏説太子瑞応本起経』卷下 大正蔵一八五／第三卷479頁b)

後漢の支曜による訳経に「譬如力士屈伸臂頃」と見え、呉の支謙の訳も、主語が「人」である他はほぼ同様である。後漢時代より当該比喩句のこの漢訳が定着していたと推される。

初期經典の漢訳は、ほぼ一樣に「譬如力士屈伸臂頃」とあり、先述したようにパーリ語にはない短時間の意の「頃」が付されている。「頃」は、『莊子』秋水篇「夫不<sub>下</sub>為<sub>レ</sub>頃久<sub>一</sub>推移<sub>上</sub>、不<sub>下</sub>以<sub>レ</sub>多少<sub>一</sub>進退<sub>上</sub>者、此亦東海之大楽也。」の成玄英疏に「頃、少時也。久、多時也。」とあるように、

短い時間を意味する。但し「譬如力士屈伸臂」の如き比喻表現を受ける「頃」の用法は特異に見受けられる。「頃」が一語を受けて時間の幅を示す「俄頃」（にわか）、「有頃」（しばらくして）といった例は、

倏忽数百、千里俄頃。

（西晋・郭璞「江賦」「文選」卷十二）  
有頃、沛公起如頃。 （『漢書』卷一上「高帝紀」）

と古くよりある。しかし「頃」に二語以上の語が上接した例は、『文選』や史書には見当たらない。

一方、漢訳経典には比喻表現を受ける「頃」の用例が多々見える。

其土、中夜後夜、阿耨達龍王数数随<sub>レ</sub>时起<sub>二</sub>清淨雲<sub>一</sub>。

周遍世界而降<sub>二</sub>甘雨<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>擣<sub>レ</sub>牛頃、以<sub>二</sub>八味水<sub>一</sub>潤沢

普洽。

（『長阿含経』卷十八 世記経 大正藏一／第一卷119頁

a）  
当<sub>レ</sub>知、行慈比丘身壞命終、如<sub>レ</sub>発箭之頃<sub>一</sub>生<sub>二</sub>梵天上<sub>一</sub>。

（『長阿含経』卷十六 堅固経／107頁a）

またたく間の出来事を、搾った牛の乳がほとばしるように、矢の発せられるように、という一瞬間のことに比し、その比喻表現を短時の意の「頃」が受けている。また六朝の小説類にも短時間を表す次のような「頃」の例が見える。

日暮、復夢曰。我来<sub>二</sub>迎新君<sub>一</sub>、止在<sub>二</sub>廟下<sub>一</sub>。未<sub>レ</sub>寤之頃、暫得<sub>二</sub>来帰<sub>一</sub>。

（晋・干宝『搜神記』（二十卷本）卷十六）  
其夜、独自未<sub>レ</sub>眠之頃、見<sub>二</sub>一丈夫来<sub>一</sub>。

（『続異記』（『古小説鈎沈』所収）  
漢訳経典が俗語表現を多く含むことは諸氏により指摘されている。民衆の布教のために経典は俗語を交えた平易な文体で漢訳され、また翻訳者の方も古典の知識を要する文語に通曉していない西域人を主とした。訳経や六朝古小説に共通して見える、二語以上が上接した「頃」も、俗語的な用法と見做されよう。

なおパーリ語経典の邦訳を、先掲『長阿含経』卷二の「爾時世尊与<sub>二</sub>諸大衆<sub>一</sub>、譬如<sub>二</sub>力士屈<sub>二</sub>伸臂<sub>一</sub>頃、忽至<sub>二</sub>彼岸<sub>一</sub>。」の相当箇所で見れば次のようである。

こ、に世尊は、譬へば、力士が屈したる腕を伸ばし、或は伸ばしたる腕を屈せん如き、是の如き間に、恒河の此岸より姿を没して比丘聚と共に彼岸に立ち給ひぬ。

（平等通昭訳・『南伝大蔵経』第七卷）  
そこで、あたかも力士が屈した腕を伸ばし、また伸ばした腕を屈するように、まさにそのように（僅かの）時間のうちに、こちらの岸において没して、修行僧の群れとともに向う岸に立った。

(中村元訳『ブツダ最後の旅——大バリニツバーナ経』<sup>10</sup>)

双方の訳とも、パーリ語比喩句には本来ない短時間を表す語が「是の如き間に」「(僅かの)時間のうちに」と加えられている。仏陀を主語とする文脈に「力士」の腕の屈伸喩を挿入させるため、比喩句を「そのような短い間に」と括弧で訳したか、と察せられる。但し中村氏の附注には「極めて短い時間であることを表現するために、仏典の中に好んで用いられる句である。わが国でいう『目ばたきする間に』『一瞬間に』に相当する。」とある。当該句が空間移動に表されることは自明故、このように記されたかと察せられるが、本来この比喩句は特異な移動に伴って表され、それに要する時間が極めて短い、と言うべきで、短時間の意は一義的ではない。ただそのように捉えられ易いのも、当該句が漢訳經典において短時の意の「頃」を付して訳されてきた影響もあるか、と考えられる。

### 三

初期經典、いわゆる小乗仏教の漢訳經典では、当該比喩句は殆どが「譬力士(壮士・人)屈伸臂之頃」と訳されている。ところが、紀元後にインド・中央アジアで大乗仏教が興起し、諸経路を経て中国で訳された訳経では、定型の崩れた表現が見られるようになる。

水盃<sup>ぐ</sup>已畢、如<sup>レ</sup>伸臂頃、仏与<sup>二</sup>大衆<sup>一</sup>恍惚而還在<sup>二</sup>精舍<sup>一</sup>坐。

(後漢・支曜訳『仏説成具光明定意經』大正藏六三〇／第十五卷452頁b)

聞<sup>二</sup>七女說<sup>レ</sup>經、如<sup>レ</sup>伸臂頃、即從<sup>二</sup>天上<sup>一</sup>來下。

(吳・支謙訳『仏説七女經』大正藏五五六／第十四卷908頁c)

會<sup>レ</sup>阿難<sup>レ</sup>低舍、仏如<sup>レ</sup>伸臂頃、即<sup>二</sup>住虛空中<sup>一</sup>。

(支謙訳『龍王兄弟經』大正藏五九七／第十五卷131頁a)

『国訳一切経』解題によれば、『仏説成具光明定意經』は、大乗仏教の興隆期、大小乗の渾然融合した時代に大乗空觀を提唱した經典とあり、他二例も大乗初期の漢訳經典である。いずれも「如伸臂頃」と訳され、定型句の主語が省略され、腕を曲げる「屈」が消失している。

留意すべきは、同じ訳者でも大乗經典と先掲の小乗仏教の漢訳とで相違があることである。支曜、支謙とも、小乗經典中の比喩句は「譬力士屈伸臂之頃」と訳しているのに対し、大乗經典の訳では「如伸臂頃」とある。この相違は、依拠した原本の反映と考えられる。

初期經典では、釈迦の教説が弟子により口伝され、「力ある者があたたかも腕を曲げ、または曲げた腕を伸ばすよう

に」という文句は、異空間を神足で以て瞬時に移動する場面で唱えられた、いわば決まった意味内容が下に続く際に称される倭歌の枕詞のような役割をもつものであつたらう。初期經典ではその文句が忠実に伝えられていたものが、大乘仏教では簡便化されていったと推察される。但し定型の崩れた句形であつても、瞬時の空間移動に際して用いられたことには変わりはない。

このように腕の屈伸喩は、定型句の形が変化しつつも、初期經典から大乘經典を通じて、或る場所から別の場所への瞬間移動に伴つて表されてきた。だが、それが瞬時の動作であることが強調された表現が見られるようになる。

文殊師利、如<sub>二</sub>伸臂頃<sub>一</sub>須臾之間、從<sub>二</sub>忍世界<sub>一</sub>、忽然不<sub>レ</sub>現、至<sub>二</sub>普光土天王仏所<sub>一</sub>。

（西晋・竺法護訳『諸仏要集経』巻下 大正蔵八一〇／第十七卷763頁a）

速疾猶若<sub>二</sub>壯士伸臂之頃<sub>一</sub>、如是彼諸菩薩發<sub>二</sub>空仏刹<sub>一</sub>至<sub>二</sub>此耐提蘭仏土<sub>一</sub>。

（失訳『大乘悲分陀利経』巻六 大正蔵一五八／第三卷274頁c）

山頂有<sub>レ</sub>僧招<sub>レ</sub>手喚上、須臾申臂<sub>二</sub>至于山麓<sub>一</sub>。

（隋・灌頂撰『隋天台智者大師別伝』大正蔵二〇五〇／第十五卷191頁b）

いずれも定型句に直接「須臾」「速疾」の語が付され、速やかさが強調された表現となっている。ただ右の例でも、当該比喩句が空間移動に伴つて表されていることは前例と同様である。だが腕の屈伸喩が短時の比喩としてのみ用いられた例が次に挙げられる。

無常有<sub>二</sub>三分段無常<sub>一</sub>、念無常、亦名<sub>二</sub>少時<sub>一</sub>。三者自性不成無常。……念無常者。念謂<sub>二</sub>心念<sub>一</sub>。心道峻速。借<sub>二</sub>此念頃<sub>一</sub>、顯<sub>二</sub>法時分<sub>一</sub>。故稱為<sub>二</sub>念<sub>一</sub>。如<sub>二</sub>經中說<sub>一</sub>「彈指頃屈申臂頃瞬息之頃」、如<sub>二</sub>是之言<sub>一</sub>、寄<sub>二</sub>其色相<sub>一</sub>、顯<sub>二</sub>法時分<sub>一</sub>。或說<sub>二</sub>一念一刹那等<sub>一</sub>、寄<sub>二</sub>心以頭<sub>一</sub>。……念義如是。有為念念遷流非<sub>レ</sub>恒、名<sub>二</sub>念無常<sub>一</sub>。

（隋・慧遠『大乘義章』巻二 大正蔵一八五一／第四卷508頁a）

三種の無常の中で、「亦名少時」とされる「念無常」の説明で、經典中に短時の比喩でよく用いられる「一彈指頃・瞬息之頃」とともに「屈申臂頃」が列挙されている。ここで腕の屈伸喩は、空間移動の意が捨象され、ただ一瞬間の意で用いられている。

『万葉集攷証』も指摘した六朝の用例は、その延長上に挙げ得るものと言えよう。

歷<sub>二</sub>四時於遊水<sub>一</sub>、馳<sub>二</sub>三稔於申臂<sub>一</sub>。望<sub>二</sub>帰流而載<sub>一</sub>懷。



情鬱悒其何眞トクメン。

〔梁・陸倕「思田賦」〕『藝文類聚』「人部・隱逸上」

右の賦は類書『藝文類聚』に引かれてはいるが、「申臂」(伸臂)が初唐以前の經典や仏教關係書以外の詩文で使用された例は稀有である。作者陸倕は、『弘明集』にも著述が収められており、仏教の深い関心、經典の表現に対する素養があつてこのような表現がなされたのであろう。憶良が「申臂」を取り込んだ経緯もまた、經典に類出する当該比喩句に馴染んでおり、なおそれを短時の意として用いた表現に倣つたか、と推察される。

#### 四

憶良の作中では、序・詩とも「申臂」は「擊目」の語と対で用いられており、「擊目」の意をも明確にする必要がある。『万葉代匠記』(精撰本)は、『莊子』の「目擊而道存」により「一目見る」と捉え、対して鴻巣盛広『万葉集全釈』は「またたきの間。瞬間」と解している。諸注の多くは後者に従うが、『新日本古典文学大系万葉集』は翻つて「一目ちらりと見る」とする。どちらも短時間の意と解す点では同じだが、これを「一目見る間」と取るか「まばたきをする間」かで相違し、さらに前者は「擊目」ではなく「目擊」の語を根拠とすることに留意される。

「目擊」は、『万葉代匠記』の挙げる『莊子』田子方篇には次のようにある。

仲尼曰、若<sub>二</sub>夫人<sub>一</sub>者、目擊而道存矣。亦不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>以<sub>一</sub>容<sub>レ</sub>声矣。

郭象注には「目裁<sub>ワザカニ</sub>往<sub>キテ</sub>、意已<sub>ニ</sub>遠<sub>シ</sub>。無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>容<sub>ニ</sub>其徳<sub>一</sub>音<sub>一</sub>也。」と、一目見て悟り、言葉を交わす必要がないとある。成玄英疏が「撃、動也。夫体悟之人、忘<sub>レ</sub>言得<sub>レ</sub>理、目裁運動而玄道存焉。」と説く如く、「目擊」は、素早く目を走らせ見て取る意と解される。

『後漢書』列伝第十九「郅恽伝」には、郅恽が死期の迫つた友人子張を見舞い、彼の父の復讐を誓うが、友はもはや言葉なく見詰める様子が「子張但目擊而已。」と記されている。李賢注には「目擊謂<sub>三</sub>執<sub>二</sub>視<sub>一</sub>之也。」とある。

すなわち「目擊」は、目の強い動きを以て見ることに捉えられ、『莊子』では一瞥して悟る意、『後漢書』では見詰める、凝視する意で用いられている。

『万葉代匠記』は、瞬時に見て悟るという莊子の例より、「目擊」を一瞬間の意に捉え、憶良の用例の典故とする。だが莊子の「目擊而道存」は、後々漢籍では即座に真実を把握する、悟性の高い意で用いられ、これを以て「短時間」の意の典拠とは見做し難い。

「目擊」が「一目見る程の短時間」の意で用いられた例

は多くはないが、次のような唐代の例が挙げられる。

亀鏡頰迹、儀容在側。見機而作<sub>レ</sub>成於<sub>レ</sub>目擊之間。

(中唐・謝觀「執柯伐柯賦」「文苑英華」卷百一・

工芸)

若与人款曲、語話千百年事皆如「目擊」。

(唐・蘇鶻撰「杜揚雜編」(「學津討原」所収)

とりわけ前者の「目擊之間」は、憶良の「擊目之間」と表現が近く、かかる例より学んだとも考えられよう。

ただ述べたように、憶良の作では「目擊」ではなく「擊目」とあることが問題である。橘千蔭『万葉集略解』はその語順の変換を「文章の常」と述べており、「目擊」を典拠とする注釈もつまりは同様の把握によると言えよう。だが憶良の詩文にはそのような例は殆ど窺えず、まずは「擊目」とあるままに解釈するのが順当であろう。

しかし「擊目」の漢籍の用例は甚だ少ない。『佩文韻府』は、時代を遙かに下る北宋・道原撰『景德伝燈録』卷十六の「尊者撥<sub>レ</sub>眉擊<sub>レ</sub>目」を挙げ、これは文字通り「目を撃つ」意と解される。憶良が漢籍の例より「擊目」を取り入れた可能性は低いと思われる。

したがって典拠を求め難い「擊目」を、語順のままに解すなら、『万葉集全釈』の示した「まばたき」の意とするのがまずは妥当であろう。ただし「擊目」を「まばたき」

の意で用いた例は、漢籍は言うまでもなく、上代日本の文献にも見当たらない。通常「まばたき」に相当する語としては、瞬・瞬・瞬等が挙げられ、

瞬 開<sub>二</sub>闔目<sub>一</sub> 数<sub>レ</sub>揺也。从<sub>レ</sub>目寅声。(『説文解字』)

とある如くである。この「目を閉じたり開いたりしてしばしば動かす」記載を受け、『新撰字鏡』(天治本)には次のようにある。

瞬 戸胸市刃二反、開<sub>二</sub>闔目<sub>一</sub> 数動良、万志呂久又万<sub>太</sub>、久(\*享和本・目太、久)

倭語では、この瞬の開閉動作は「まだたく」(めだたく)と記され、『類聚名義抄』(観智院本)にも、

瞬瞬 音舜 マダ、ク マジロク メマジロク 又作胸とある。「目(ま)叩(たた)く」の意で、連濁してマダタク。(『古語大辞典』)と言ったとすれば、「マダタク」を「目を撃つ」として「擊目」と表したという理解は成り立つだろう。当該作の意も「瞬きをする程の短い間」と解される。

このように「擊目」は、目をしばたく意で一瞬間を表すと捉えられるが、では何故このような一般的なではない漢語を以て記したか、問題とされる。まず対句構成の上で、「申臂」(臂を伸(申)ばす)に対して、短時の意のみならず、語形も対にすべく「擊目」(目を撃つ)と表した、と

考えられる。或いは、先掲の唐代の賦に「目撃之間」とある如き、「目撃」が瞬時を表す例より影響を受けた可能性も否定できず、その場合も「申臂」と対にするために「目撃」を「撃目」とし、「目を撃つ」ことが目をしばたく、瞬きをする間の意と解されることからそのように表した、とも推察される。

さらに憶良が重ねて使用した表現であることから、かかる常用句があった可能性も検討すべきだが、「撃目（目撃）—申臂」という対句の先例は見出し得ない。「申（伸）臂」の用語は初唐までの經典や仏教書以外の漢籍に殆どなく、その修辞も見出し難い。ただ先述した『万葉集略解』は「目撃を撃目とかへ、交臂を申臂とかへたるは文章の常也。」と述べており、「文章の常」との認識は問題としても、類似の用語を指摘していることは参照される。「交臂」は『莊子』田子方篇の「吾終身与汝交一臂而失之。」を基とし、臂を交える交友の意で用いられ、

交<sub>レ</sub>臂久変化、伝<sub>レ</sub>火<sub>酒</sub>薪草。

（梁・江淹「雜体詩三十首 五言 孫廷尉（綽）雜述」  
『文選』卷三二）

のように交友を懐旧して表されている。とりわけ墓誌や哀悼文の類に頻用され、

瞬目交臂、遂成<sub>二</sub>古昔<sub>一</sub>。

（盛唐・符載「祭何大夫文」『全唐文』卷六九一）  
といった表現も見え、「目」と「臂」の対で瞬時を表す例は、憶良の表現の糧となったかもしれない。

だが「交臂」と「申臂」はもとより由来のまったく異なるものであり、間接的な影響の考えられる種々の表現はあっても、直接の典拠とされる例には恵まれない。「撃目」の先例がなく、おそらくは「申臂」に合わせて憶良が表したと推されることから、「撃目」—「申臂」は憶良が独自に創出した対句表現と考えられる。

## 五

「撃目」—「申臂」の対は作品中いかに用いられているか。漢文序は一貫して四六文による対句表現が成され、三段より成る。一段目は「得悟唯一也」までで、儒仏の教えにより悟を得べきことを説く。第二段では、それに対し「但以」として、現世の無常、人の世の儚さをあげ、その実相が嘆じられる。第三段では悲嘆のうちより「内教」を抛り所として自身の達観が記されている。

詩は、序の大部を占める第二段の無常の叙述を受ける。  
第一・二句は、序の「撃目之間、百齡已尽、申臂之頃、千代亦空。」と比喩を同じくしながら仏教的思惟を深めた表現となっている。

俗道変化猶「擊目」、人事經紀如「申臂」。

空与「浮雲」行「大虚」。心力共尽無所寄。

「擊目」——「申臂」の順は、七言四句詩の第二、四句末の「臂」「寄」を押韻させるため、と考えられる。一句目の「俗道」は人の世、「変化」は仏教語で、人の世の変転を意味する。「人事經紀」の「經紀」は「常の道」の意で解釈されてきたが、『新日本古典文学大系万葉集』の指摘するように、ここでは「往来する」意で取るべきであり、前句の「俗道変化」と対応する。世の変転、人事の往来は、目をしばたき、手を伸ばす程短い間だと言うのである。人の世の儂さを譬えるに、「擊目——申臂」の対句で表した事由を求めるなら、俗世が瞬時に過ぎる短さを、目、腕を動かす程の間という実的な感覚で表そうとしたのではないか。めくるめく生々流転の世に自身も束の間存在し、人事の短さを実感したこととして、身体的な比喻を以て表現した、と推される。

先述したように、憶良の漢語表現には、典故を持つ成語を、通常とは異なる用い方をしたり、従前にはない用語と合わせた例が見られる。經典に由来し短時の意で用いられた「申臂」の語を、「擊目」という同じく身体的な比喻と合わせて、瞬時を表す対句と為した当該表現にも、かかる特性を認めることができよう。さらに、そうした憶良の漢

語表現には、典故の意味するところは保持しながらも、漢語の語意を直接生かして表した、という共通する特徴が窺える。すなわち、漢籍に典故を持つ成語は、「蔵舟」が無常の意を、「申臂」が短時の意として受容され、継承されていき、漢語自体の表す意と、典故に依る意味が乖離しているものが多いが、憶良はそうした出典語を、典故による原義は受け継ぎつつ、漢語自体の語義を生かした表現と為している。先掲「日本挽歌」の例では、『莊子』の寓話に基づき常用される「蔵舟」等ではなく、「力負」の語を用い「黒闇」と対にして、大力の男が尋ね回る様子で死の迫る恐怖を表象し、また無常を意味する用語「二鼠・四蛇・過隙之駒」を、「度目之鳥」も加え、隔句対にして動物の疾駆する動きで時の過ぎる速さを表している。当該句もまた、短時の意の「申臂」を「擊目」と合わせて、身体の動きによる一瞬間の比喻とするものである。このように出典語をただ慣用的に用いるのではなく、漢語の語義を捉え直し躍動感のある表現と為したところに、憶良の漢語表現の獨創性が窺えよう。

出典の問題に立ちかえれば、当該作の「申臂」の典故として經典の常套句「壯士屈伸臂之頃」をあげる注釈は、それが空間移動を意味することから適切とは言いがたい。「申臂」が短時の意のみを表す用例をも挙げるべきであり、本

稿で累々述べ来たったことは、江戸期の二つの注釈の出典考証に尽きているとも言える。同様のことは、先掲の「二鼠」「四蛇」の出典に関して、板橋氏の述べられた「万葉の註釈家がこれらの句の原典を求めると当って仲介をなしている『六朝』を躍び超えて、じかに本源たる印度へとりついたのは卒直な態度ではあるうが、懇切な扱い方とは言えない」という提言にも窺える。上代人の受容以前に意味・語形の変化した出典語の注解は、最も古い基となる出典を挙げた上で、万葉集の用法に近い用例を挙げることで望ましい。漢籍、經典の原典の語句が、典拠として利用されていく過程でいかに変遷したか、という出典語の変容を踏まえた考察は、語句の解釈のみならず、上代の典籍利用の状況を明らかにする上でも重要であるう。

### 注

- (1) 拙稿「山上憶良の仏教受容―維摩と釈迦の並挙表現をめぐって―」(『万葉』第一八九号、二〇〇四年)。
- (2) 板橋倫行「黒白二鼠譬喩譚について」(『万葉集の詩と真実』、一九六一年、初出一九三六年、淡路書房新社)。
- (3) 岩井昌悟「『あたかも力ある人が曲げた臂を伸ばし、伸ばした臂を曲げるように』―神変のイメージの変遷を追う―」(『東洋学論叢』第三十三号、二〇〇八年)。

- (4) 初期仏教については、三枝充恵『インド仏教思想史』(一九七五年、第三文明社)、中村元『フツダのことは―スッタニパータ―「解説」(一九八四年、岩波書店)等を参照した。

- (5) 末木文美士『長阿含経「解説」』(『現代語訳「阿含経典」―長阿含経』、一九九五年、平河出版社) 参照。

- (6) 注(3) 岩井氏論文。

- (7) 万葉集の写本が「頃」を「頃」としているのも、「頃」が正統的な漢籍には見えないことにも依るかと思われる。

- (8) 太田辰夫『中国語史通考』(一九八八年、白帝社)。

- 森野繁夫「簡文帝の詩にみえる『―自』―『本自』を中心として」(『広島大学文学部紀要』第三二卷一号、一九七三年)。

- 森野繁夫「六朝訳経の語法Ⅰ」(『広島大学文学部紀要』第三三卷、一九七四年)。

- 森野繁夫「六朝訳経の語彙」(『広島大学文学部紀要』第三六卷、一九七六年)。

- 朱慶之「仏典与中古漢語詞彙研究」(一九九二年、文津出版社)。

- (9) 森野「簡文帝の詩にみえる『―自』』(注(8) 論文)の説くように、漢訳經典が「聞き手、読み手に十分に理解できるものであることが必要であったために、口語または口語に近い表現でなされた」のであれば、民衆に分かり易く伝えるため、空間移動に伴って表される「力士

が腕を屈伸する」比喻句に、訳経では謂わばそれが瞬時になされるといふ解釈を加え「頃」が補われた、とも考えられよう。すなわち初期漢訳者は民衆の布教のための口語使用と相俟つて、内容的な理解を促す面からも「頃」を補い翻訳した、と推される。

(10) 中村元『ブツダ最後の旅―大バリニツバーナ経』(一九八〇年、岩波書店)。

(11) 何故力士の腕の屈伸喩が空間移動の記述に伴って表されたか、という事由は不明のようであり、それを論じたものは未だ見出し得ない。

(12) 大藏経底本は「信」に作るが、その校異に、延宝二年刊村上氏藏本に「借」とあるによる。

(13) 『藝文類聚』及び明張溥『漢魏六朝百三家集』所収『陸太常集』には「申臂」とある。先述したように『万葉集攷証』は『佩文韻府』により「伸臂」と記したと思われる。

(14) たとは『世説新語』(棲逸)の「阮步兵嘯、聞<sub>二</sub>数百歩<sub>一</sub>……」の劉孝標注には「竹林七賢論曰、籍婦、遂著<sub>二</sub>大人先生論<sub>一</sub>……覲<sub>二</sub>其長嘯相和<sub>一</sub>、亦近<sub>二</sub>乎目擊道存<sub>一</sub>矣。」と、真実を即悟る意で記されている。

〔付記〕 本稿は、平成三十年度上代文学会例会の研究発表に基づく。発表の席上、藏中しのぶ氏、鉄野昌弘氏をはじめ、多くの方々から貴重なご意見を賜った。また経典について鹿見島大  
学の中筋健吉氏にご教授を頂いた。記して感謝申し上げます。